

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論文題目

Therapeutic Value of Selective Salpingography for Infertile
Women with Patent Fallopian Tubes : The Impact on Pregnancy
Rate

(疎通性卵管を有する不妊婦人に対する選択的卵管造影法
の治療的意義：妊娠率向上へのインパクト)

氏名 神山 茂 (印)

【目的】 卵管の病変は不妊症の主要な原因のひとつである。その治療法のひとつとしての選択的卵管造影法(Selective Salpingography :SSG)は、卵管が閉塞している不妊症例に対する標準的な治療法となってきた。一方、我々は、SSGを閉塞性卵管だけでなく、疎通性卵管に対しても施行してきた。これは、卵管内を機械的に洗浄することが卵管機能を改善し妊孕性を高めるであろうという仮説に基づいている。本研究の目的は、疎通性卵管を有する不妊症例に対してSSGが臨床的に有用か否かを検討することである。【方法】 1992年9月から1996年5月の期間に、子宮卵管造影法にて卵管の疎通性があることを確認後、6周期以上経過しても妊娠成立しない不妊症例に対してSSGを勧め、実際にSSGを受けた37例を研究群、SSGを希望しなかった43例を対照群とし、これら症例のカルテを後方視的に再評価した。SSGは、硬性子宮鏡での観察下に5.5Frカテーテルを卵管口に位置させ、透視下

に、3mlの造影剤および5mlの生理食塩水を卵管内に直接注入した。SSG 施行後少なくとも10周期は、他の有意な治療法の併用は行わず、妊娠成立の有無を経過観察した。関連する不妊因子がある患者には、SSG 施行前から受けていた治療を続行した。研究群と同様に、対照群においても妊娠成立の有無を経過観察した。【結果】2群間における背景は、平均年齢が対照群より研究群の方が有意に高かった($p=0.033$)以外は、平均不妊期間、原発性・続発性不妊の比率、関連する不妊因子の有無の比率について差は無かった。SSG施行による合併症は無かった。SSGそのものの成功率、すなわち疎通率は、症例当たり100% (37/37)、卵管当たり95.9% (70/73)であった。妊娠率は、研究群でSSG施行後12カ月目48.6% (18/37)、対照群でSSG拒否後12カ月目で11.6% (5/43)であった。全体の妊娠率は、対照群に比して研究群の方が有意に高率であった($p<0.001$)。【考察】原因不明と診断

された不妊症例には、実際には多数の卵管因子不妊例が含まれていると推測できる。臨床的に認められない卵管内腔の線維症や癒着、組織片の凝集が正常卵管の機能を阻害し、妊孕性を低下させていると思われる。疎通性卵管を有する不妊症例に対するSSGの有効性を報告したのは本研究が初めてである。本研究の知見、すなわち、疎通性卵管を有する不妊症において、SSG非施行群よりも施行群の方が有意に累積妊娠率が高率であったということは、このような症例に対して本治療が臨床的に有用であることを強く示唆している。疎通性卵管に対するSSGの治療的意義は、卵管内の機械的洗浄、部分的癒着の剥離などであろう。【結論】SSGは本来閉塞性卵管に対する治療法であるが、本研究の知見により、疎通性卵管を有する不妊症例に対してもSSGの適応が勧められうると思われた。

論文審査結果の要旨

報告番号	* 課程博 論文博	第 号	氏名	神山 茂
論文審査委員				平成 12 年 7 月 5 日
	主査教授	小川 由英		
	副査教授	有泉 誠		
	副査教授	村山 貞之		
<p>(論文題目)</p> <p>Therapeutic Value of Selective Salpingography for Infertile Women with Patent Fallopian Tubes : The Impact on Pregnancy Rate (疎通性卵管を有する不妊婦人に対する選択的卵管造影法の治療的意義 : 妊娠率向上へのインパクト)</p> <p>(論文審査結果の要旨)</p> <p>上記論文に対し、その研究に至る背景と目的、論文内容と学術的水準、研究成果とその意義などについて慎重に審査し、次のような審査結果を得た。</p> <p>1. 研究の背景と目的</p> <p>不妊症の主な原因のひとつに卵管因子がある。検査上明らかに閉塞した卵管もあるが、疎通所見は確認できるものの、その疎通性が十分でなく妊娠に至らない不妊症も多数あると推定できる。このようないわゆる潜在性卵管因子に対する治療としては、現在確立されたものは無い。よって、このような症例は腹腔鏡下精査・治療、体外受精-胚移植法に代表される生殖補助技術による治療の適応となっている。これらの治療法は、患者に精神的・肉体的・経済的に大きな負担を強いる治療であり、妊娠率も20数%に過ぎない。一方、閉塞卵管に対する治療として、選択的卵管造影法 (SSG) による卵管の再疎通術が確立されてきており、これは安全でかつ経済的であり、患者に対して負担の少ない治療である。本論文では、この閉塞卵管に対する治療とされているSSGを疎通性が不十分である卵管に対して施行し、その疎通性を改善させることによって、妊娠率を高めることができるか否かを検討している。</p> <p>2. 研究内容と学術的水準</p> <p>卵管の疎通性があることを確認後、十分経過をみても妊娠成立しなかった不妊症80例に対し、SSGを施行した37例を研究群、施行しなかった43例を対照群とし、その後の妊娠成立の有無を</p>				

- 備考 1 要旨の規格は、A4 とし縦にして左横書きとすること。
2 要旨は800字~1200字以内にまとめること。
3 * 印は記入しないこと。

論文審査結果の要旨

経過観察した。関連する不妊因子の有無は影響ないように配慮されている。本研究のSSGは子宮鏡下に卵管口を確認後、卵管内にカテーテルを10-20mm挿入し、それにより直接卵管内に油性造影剤を比較的高い圧で注入する方法である。2群間における臨床的背景では、平均年齢が研究群の方で有意に高かった ($p=0.033$) 以外は、他に有意差は無かった。SSG施行による合併症は無かった。SSGそのものの成功率、すなわち疎通率は、症例当たり100%(37/37)、卵管当たり95.9%(70/73)であった。12カ月まで経過した時点で、各群の妊娠率は、研究群48.6%、対照群11.6%であり、研究群で有意に高率であった($p<0.001$)。以上の結果より、SSGは本来閉塞性卵管に対する治療とされているが、疎通性卵管を有する不妊症例に対してもその適応が拡大されてよいと思われた。この知見の臨床的有用性はきわめて高いと結論できる。

3. 研究成果と意義

現在の不妊診療では、疎通性卵管を有する不妊症においてある期間を経過すると体外受精-胚移植法が適応され、患者の負担はきわめて大きいものとなる。これらの患者に対してSSGを適応することによって、その約50%を妊娠に至らしめることが可能であった。この成績は卵管性不妊症の治療の場に、これまでなかった国際的にユニークなアイデアを提供しており、臨床的にきわめて意義あるものとする。

以上の結果から、本論文は学位授与に十分値する内容であると判定した。